

告示SRTの各種方略課題遂行への転移作用

小牧純爾(金沢大・文)

告示SRTが「win-stay, lose-shift」遂行を促進することが明らかになっているが、この同じSRTが oddity 学習に対しても促進的作用をもつかどうかを6頭のオスのニホンザルを用いて吟味した。告示SRTとは、連続逆転訓練(successive reversal training)の場面で、次の逆転の正刺激(現学習の負刺激)を1個呈示し、それへの反応を強化する(Pタイプ)か、次の逆転の負刺激(現学習の正刺激)を1個呈示し強化しない(Nタイプ)試行を、逆転直前に挿入する訓練手続をいう。

6頭を2群〔(P'-3)群と(N'-3)群〕に分け、WGTAにおいてPまたはNタイプの告示SRTを80および20逆転の2つのブロックに分けて与えた。第1ブロックの前、第2ブロックの前と後に、24課題からなる oddity 課題のシリーズを与え、告示SRTからの作用をテストした。oddity 課題は都合4シリーズ、96課題与えた。

Oddity 課題の遂行はシリーズを重ねるにつれ向上したが、(N'-3)群の向上は著しく、第4シリーズにおいて oddity 学習を達成した。一方、(P-3)群は途中で停滞現象を示し、4シリーズ内での達成は見られなかった。

Nタイプの告示SRTが oddity 課題遂行を促進することが確かめられた。これは、告示SRTが、選択方略に関する学習だけでなく、「注意」の学習をも成立させることを意味するものと理解された。

霊長類の繁殖成功度を左右する行動学的、社会学的要因

山極寿一(日本モンキーセンター)

日本国内の動物園に飼育されている各種霊長類の繁殖状況と、繁殖成功度を左右する行動学的、社会学的諸条件を調べるために、日本モンキーセンターをはじめ関東と関西の動物園で行動観察や聞き込みによる調査を行なった。また、全国の65の動物園にアンケート調査を依頼し、38園から回答を得た。調査は飼育されている各種霊長類の、飼育ケージの大きさ、飼育群の性・年齢構成、繁

殖成績の良否、分娩障害の有無、他園との繁殖協力、人工受精例、メスの発情徴候、子殺しや飼育個体間のトラブル、誘惑行動や育児行動、雌雄間の優劣等について実施され、78種の霊長類359例の資料が収算された。資料を分析した結果、以下のことがこれまでに明らかになっている。

1) ケージの大きさと個体数から算出した個体密度の低いものは、繁殖成績が悪い傾向がある。

2) どの種でもオスとメスのペアで飼育されている例が多いが、野生状態で単雄複雌、複雄複雌の群れを造る種では、ペア飼育の繁殖成績が悪い場合が多い。

3) 子殺し例は22種の霊長類で見られたが、リスザルやマントヒヒで多く、オスが複数の時によく発現する傾向がある。

4) 母親の育児拒否と子殺しは明らかに高い相関があり、母親以外の個体が赤ん坊の育児に参加する種でも子殺し行動が多く見られる。

5) メスの発情徴候は原猿類のキツネザル科、真猿類オナガザル科のマンガベイ、ヒヒ、マカカ属、オランウータン科のチンパンジー属によく認められるが他の種では判別が難しい。雌雄間の優劣も原猿類と真猿類のマーモセット科ではあいまいであり、誘惑行動や誇示行動の発現様式はこの2つの要因によって多大な影響を受けているものと考えられる。

今後これらの資料の分析を進め、野生状態についての報告とも比較し検討を加えるつもりである。

霊長類のLp(a)リポ蛋白について

牧野和彦・前田悟司・藤橋隆志(岐阜大・医)・安部 彰・清島 満・川出真坂(岐阜大・医)

(目的) Lp(a)リポ蛋白〔以下Lp(a)〕は人と霊長類にのみ存在する遺伝性リポ蛋白とされているが、霊長類のLp(a)に関する報告はきわめて少なく、未だ系統的な研究は行われていない。そこでわれわれは、各種霊長類について血清Lp(a)濃度をロケット免疫電気泳動法により測定した。同法により検出不能の検体についてはELISA法により測定した。

(結果) 原猿亜目に属するワオキツネザル、オオガラゴ、真猿亜目の広鼻下目に属するコモンマ